

今週の為替相場見通し(2024年5月7日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		151.86 ~ 160.24	153.00	152.00 ~ 157.00
ユーロ	(ドル)		1.0650 ~ 1.0812	1.0764	1.0700 ~ 1.0880
(1ユーロ=)	(円)		164.02 ~ 171.60	164.61	164.50 ~ 168.00
英ポンド	(ドル)		1.2467 ~ 1.2634	1.2547	1.2300 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	191.37 ~ 200.55	192.02	189.00 ~ 195.00
豪ドル	(ドル)		0.6466 ~ 0.6650	0.6611	0.6450 ~ 0.6790
(1豪ドル=)	(円)	*	99.94 ~ 104.94	101.15	100.00 ~ 103.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1)今週の予想レンジ: 152.00 ~ 157.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

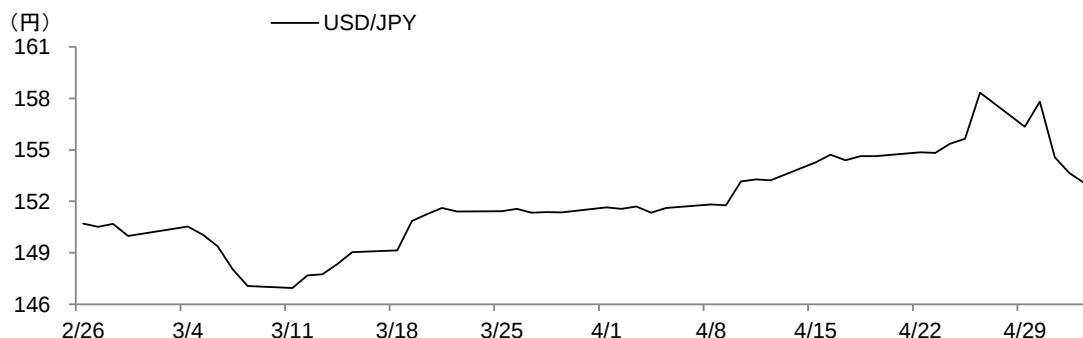
先週のドル/円は、週初160円を突破も、その後急落し、週後半に151円台後半まで下落するなど乱高下。29日、158.19円でオープンしたドル/円は、東京休場で薄商いの中、ドル買いが加速。一時160.24円まで急騰後、為替介入と思われるドル売り円買いから、154.40円まで急落。その後は押し目を拾う動きも出て156円台まで戻して引けた。30日、東京時間は輸入勢の月末実需のドル買いに押され157円台まで上昇。その後は為替介入への警戒感から上値重く推移したが、米国時間に公表された米1~3月期雇用コスト指数の市場予想を上回る結果を受け、157円台後半まで上昇した。1日、東京時間から米金利の上昇を眺めながら高の展開となり157.99円まで上昇。米国時間に入ると米経済指標の軟調な結果を受け、157円台半ば付近まで下落。注目されたFOMCの結果は、予想よりハト派と受け止められドル/円は157円まで下落。その後為替介入と思われるドル売りにより153円ちょうどまで急落後、154円台半ばまで戻して引けた。2日、東京時間朝方からドルの買い戻しが進み156円前半まで上昇。しかし、その後は米金利の低下や、為替介入への警戒感から一転し軟調な値動きとなり155円台前半まで下落。海外時間に入っても米金利低下につれたドル安が継続し153円台まで下落して引けた。3日、東京休場で市場参加者少ない中、為替介入への警戒もあり、東京時間は上値重く一時152円台後半まで下落。米国時間に公表された米4月雇用統計は、非農業部門雇用者数や平均時給が市場予想を下回る結果となり、151.86円までドル安が進行、その後は小幅に持ち直し153円で越週した。

今週のドル/円は、155円付近までの持ち直しを予想。先週末に公表された米4月雇用統計こそ市場予想を下回る内容となったが、直近公表の米4月ISM製造業、非製造業景況指数では共に仕入価格指数が上昇しており、インフレの沈静化は依然道半ば。今週は比較的経済指標の公表が少ない週となるため、FRBをはじめとした高官発言が注目される。先週のFOMCでパウエルFRB議長は「次の金利の動きが利上げになる可能性は低い」としたものの、先週末ボウマンFRB理事は今後のデータ次第では、依然利上げも選択肢としてあるとの考えを示している。年内利下げの難しさが意識される発言が続けば再びドル買いが強まる可能性も。その他9日(木)には日銀主な意見が公表予定。日銀の金融政策引き締めへの慎重な姿勢が確認されれば、ドルのサポートとなろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/29~5/3)の値動き:

安値 151.86 円 高値 160.24 円 終値 153.00 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 范 哲遠

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0880 164.50 ~ 168.00 円

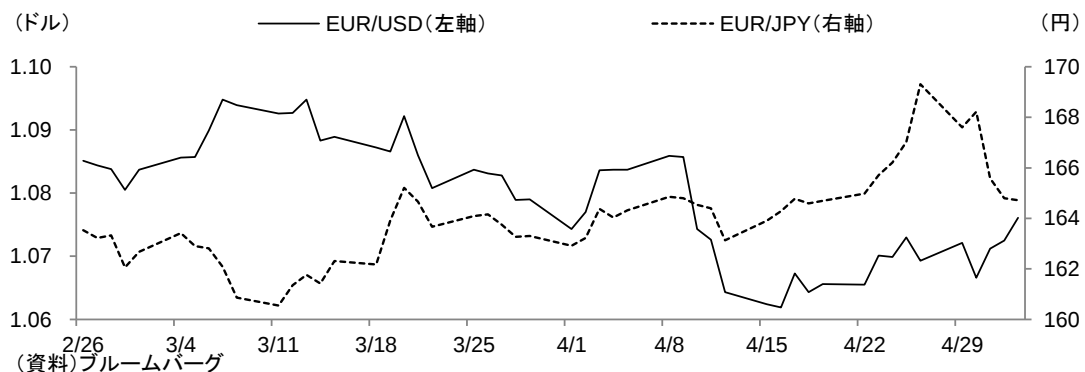
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週のユーロ/ドルは、振れ幅を伴いながらも方向感なく推移した。週初29日、1.0707でオープンしたユーロ/ドルは、小幅に上値を伸ばすも、独4月消費者物価指数(CPI、速報)の市場予想を下回る結果を受けて1.07を割り込んだ。その後、米金利低下にサポートされ再び1.07台を回復し、上下しつつも1.07を挟んで方向感に欠ける値動きとなった。30日、ユーロ/ドルはユーロ圏4月コア消費者物価指数(HICP、速報)やユーロ圏1~3月期GDP(速報)の良好な結果を受けた独金利上昇を背景に1.0735まで上昇。その後は、堅調な米経済指標を受けた米金利上昇が重しとなり、1.06台後半に反落した。1日、ユーロ/ドルは一時週安値となる1.0650に続落したものの、米金利低下が支援材料となり、1.07台を回復した。2日は翌日に米雇用統計を控える中、小動きとなった。3日の米4月雇用統計は冴えない結果となり、ユーロ/ドルは一時1.08手前まで上昇するが、流れは続かず1.07台後半で越週。

今週のユーロ/ドルは底固く推移するものと予想。東京休場の6日(月)、ECBシムカス・リトアニア中銀総裁は6月を皮切りに年内3回の利下げを見込んでいるとの発言。概ね基本シナリオに沿って進んでおり、予想外の事態がなければ、ECBは金融政策を緩和する余地があるとの認識を示唆。市場はECBの6月利下げについて相応に織り込んでおり、ここからのユーロの更なる下値余地は限定的か。一方、米国は1日に開催されたFOMCでは市場想定よりもハト派的な内容だったことや米雇用統計の冴えない結果を受けて、米金利低下を伴ってドル売りとなった。足許は米金利低下バイアスがかかる中、ユーロの買戻しが入りやすい地合いが継続すると考える。今週の主な経済指標としては、7日(火)ユーロ圏3月小売売上高、9日(木)デギントスECB副総裁・チポローネECB理事講演、10日(金)4月ECB政策理事会議事要旨公表などが予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/29~5/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.0650 高値 1.0812 終値 1.0764
(対円) 安値 164.02 高値 171.60 終値 164.61



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2600 189.00 ~ 195.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

過去1週間の英ポンド相場は対ドルで反発。5月1日のFOMCでは、パウエルFRB議長が追加利上げの可能性は低いとし市場でハト派的との受け止めが広がった。FOMC後には米金利低下・ドル安の流れとなっている。市場の反応は「往って来い」となったものの、5月3日公表の米4月雇用統計や米4月ISMサービス業指数も市場予想を下回る結果となり、ドル反落の流れが続いている。英国側では相場のカタリストとなるような材料は無かった。なお、年内にも実施される可能性がある英国総選挙に向けて注目されたイングランド北東部ブラックプールでの下院補欠選挙では、野党・労働党の候補が与党・保守党の候補を大差で破っている。ロンドンなど主要都市の市長選も2日に行われており、本原稿執筆時点の3日現在、開票作業が進んでいる。ポンド/円は大幅反落。先々週末4月26日終値の197.80円前後から5月3日時点で192円前後まで下落した。4月29日日中には一時、2008年8月以来となる200円をつけていた。財務省の2度にわたると市場で見られている円買い介入や、グローバルなドル安を受けて円が反発した。

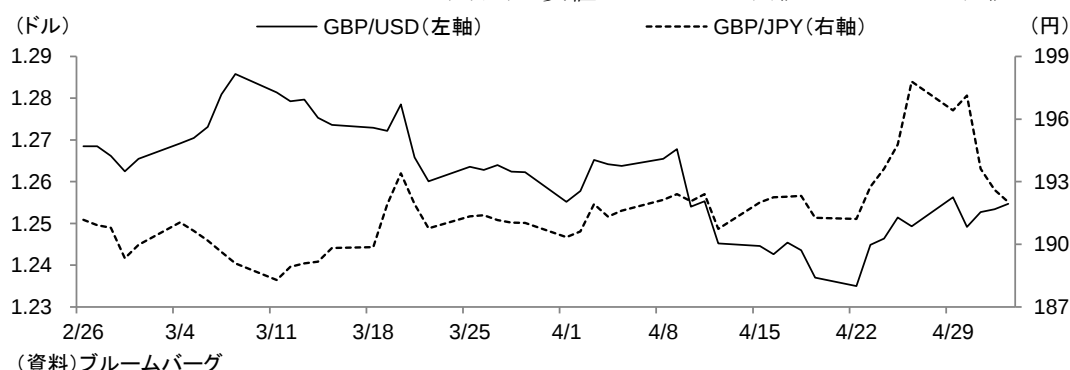
今週のポンド相場における最大のイベントは5月9日のイングランド銀行(BOE)の金融政策発表である。政策金利を5.25%で据え置く公算が大きく、市場にとって「ノーイベント」となる可能性もあるが、今会合はポンド相場にはやや下方リスクが大きいように思われる。注目されるのは各MPCメンバーの投票行動である。3月会合は据え置き8、利下げ1という結果だった(利下げ票はドゥイングラ委員)。5月会合でも同じ票数という見方がベースシナリオだが、利下げ票が増える可能性は否定できない。特に、今会合は通常は同一の投票行動をとることが多いBOE内部のメンバーの間で意見の食い違いが見られる点が不確実性を高めている。利下げに前向きと見られるのがベイリー総裁とラムズデン副総裁である。4月17日にベイリー総裁は4月のCPIはかなりの落ち込みを見せると予想していると発言したほか、ラムズデン副総裁は4月19日にがインフレを取り巻くバランスは2024年2月のMPCの予想に比べて下振れ傾向にあると述べた。ラムズデン副総裁はベイリー総裁と違った投票行動を取ることが過去にもあったため、利下げ票が2となる可能性がある。一方、4月23日にBOEのピル・チーフエコノミストは、利下げ時期の判断にあたっては慎重に慎重を重ねると述べ、インフレが持続するリスクへの警戒を怠らないことが当局者は必要だと主張した。ピル氏はこれまでベイリー総裁と違った投票行動を取ったことは無いが、発言内容を見る限りは今回、BOEの内部のメンバーの間で大きく意見が分かれることもあるかもしれない。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/29~5/3)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2467 高値 1.2634 終値 1.2547

(対円) 安値 191.37 高値 200.55 終値 192.02



(資料) ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6790 100.00 ~ 103.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週は米国イベント主導で0.6465~0.6650で振幅した。29日は0.6540近辺で取引開始後、東京休場で薄商いな中、クロス/円主導で序盤から買いが優勢となり、豪ドル/円は2013年以来の高値104.94円を記録。豪ドルも一時2週間ぶり高値0.6587を付けた。流動性が低い中でドル/円が一時160.24円を記録した後、154円台半ばまで急落。政府・日銀による為替介入の憶測が広がった。30日は豪3月小売売上高が予想に反して前月比マイナスの伸びとなった事で、豪ドルは売り優勢となった。米1~3月期雇用コスト指数が予想を上回るとドル買い優勢となり、米金利は大幅上昇した。加えて米4月シカゴPMIや米4月コンファレンスボード消費者信頼感指数が予想を下回ると、米株価は下落幅を拡大。豪ドルは頭を押さえられて0.6470近辺で引けた。1日、FOMCでは政策金利の据え置きを決定し、米国債の保有証券減額ペースを6月より月額最大600億ドルから250億ドルへ減額するとした。パウエルFRB議長がインフレ上昇率の低下ペース減速を認めつつ、次の動きが利上げとなる可能性は低いと述べた事を受け、米金利が低下。ドル売りから豪ドルは0.6540まで上昇した。2日は米新規失業保険申請件数が予想を下回り、単位人件費が大幅な伸びを示し、一時米金利が上昇すると、豪ドルは売りが優勢となったがすぐに反転した。3日、米4月雇用統計は雇用者数変化が予想を下回り、失業率は0.1%ポイント悪化の3.9%、賃金の伸びは鈍化した。早期米利下げ観測を受けたドル売りを背景に豪ドルは0.6580近辺から0.66台半ばまで上昇。早ければ9月から利下げ開始との見方が強まり11月の見方から前倒しされ、年内には2回の利下げを再び織り込んだ。ドル/円は153円台前半から一時151.80円台まで下落したものの、NY引けにかけては153円台まで円安方向に値を戻した。豪ドル/円は100円台後半から101円台前半まで上昇して越週した。

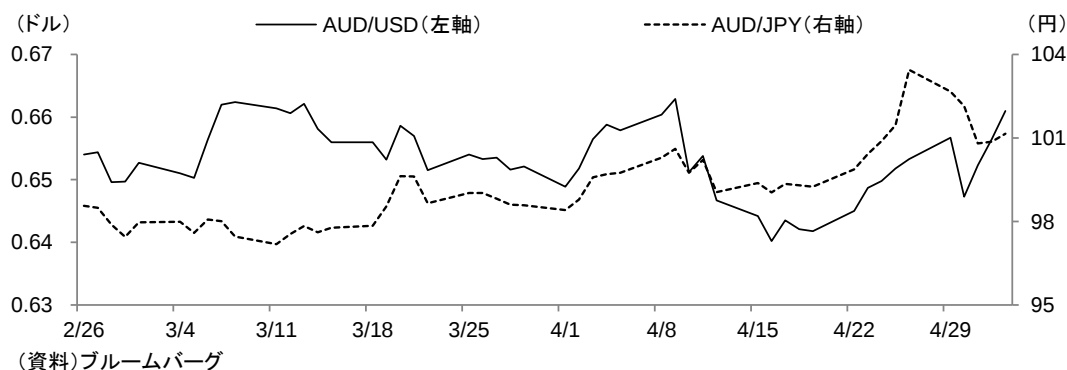
今週は7日(火)にRBA会合が予定されており、政策金利を据え置く事が予想されているものの、インフレ見通しを上方修正する可能性や利上げリスクについて言及があるかが焦点となる。直近の豪3月雇用統計では失業率が引き続き4%を下回っており、豪1~3月期消費者物価指数(トリム平均・前年比)ではインフレの鈍化がスローダウンしている。足許では利上げのリスクが僅かに高まってきているものの、引き続き今後の軌道は引き続きデータ次第となるとみる。現在の豪金利先物市場では今年8月までに+20bpの利上げを織り込んでいる。豪ドルは先週金曜の米4月雇用統計が追い風となり、0.66台を維持しており、今回の声明文でインフレ見通しを上方修正、もしくは利上げリスクについて言及するようであれば、更なる利上げ織り込みが進むため豪ドルは更に上を目指すとする。利上げリスクについて声明文の文言がソフトな表現となれば上昇値幅は限られよう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/29~5/3)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6466 高値 0.6650 終値 0.6611

(対円) 安値 99.94 高値 104.94 終値 101.15



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。